

## 産地大川で 垣根を超えたものづくり

坂井建具製作所

代表 坂井 貴之 さん

住所…大川市大字向島205219

TEL…094418612716

FAX…094418612790

今月の夢追い人は、坂井建具製作所の坂井貴之さんにお話を伺いました。

坂井建具製作所は、昭和47年創業。坂井さんで三代目になられるとのこと。では、坂井建具製作所ではどのような事業を展開されているのでしょうか。

「主にハウスメーカーや工務店の既製品では対応できないもの、いわゆる別注品、特注品を製造しています。例えば大手メーカーが作らないステンドグラス入りのドアだったり、そういったオーダー品や規格外の建具などを作ったりしていますね。昨年末は新しい機械を導入するにあたって、大きな建具にも対応できる工場に改装しました。機械自体

はものづくり補助金を利用して導入しましたが、補助金がないければここまで大掛かりな改装はできなかったですね」

これまで使用してきた工場や機械はすべて先代、先々代から譲り受けられた坂井さん。「土地にしても建物にしても機械にしても、全て譲り受けたものばかりで、これまでは自分で借金などを背負ってないかすということはありませんでした。ものづくり補助金が良いきっかけで、自分の責任が伴うことが増えたため、より頑張らなくてはと改めて実感しました」

また最近では設計士からのオーダーも多くなってきたとのこと。

「この前は設計士のオーダーで、ベースは木でしたが銅の建具を製造しました。設計士やデザイナーはデザインが専門で見た目重視。私達は作る専門で、構造的なことや金物も含めた耐久性も考えないといいません。機能性や耐久性の話をしながら、設計士の方と折り合いをつけるのが難しいです。何度も話し合いを重ねて、思い描かれたものに仕上げていくことが多いですね」

では、坂井建具製作所のことだわりはどういった部分でしょうか。

「うちでは早くから国産材、特に国産杉を使用するようにしています。ウッドショックを見越していたわけじゃあ





補助金を利用して導入された機械（パネルソー）

りませんが、10数年前から1年分です。使うであろう吉野杉を現地まで行って仕入れて、お客様に提供できればというところから始めました。お客様からしたら国産杉は高いイメージがあるみたいで……。ただうちでは大量仕入れをしてるので、お客様の要望に応じた価格で提案できます。お客様にも喜んで国産杉を選んでもらえていると思います。杉は、内側の部分が赤っぽい色、外側は、白っぽい色をしています。昔からその色合いが混在している材を源氏と平氏に例えて源氏と呼ばれています。その両方を使うことができ、その色合いも楽しんで

「もともと他で数年働いてから家業に入るつもりでいました。ただ以前働いていたところを辞めてすぐに父が亡くなりました。父の体調が思わしくなかったから戻ってきたと思われていますが、個人的な区切りを付けたタイミングと父の急逝がたまたま重なっただけなんです。なので、父と一緒に仕事をしていたの

ただけです。捨てるところが少ないです。今はコ罗纳やウッドショックなどの影響で価格も変動していますが、売上の影響はさほど大きな影響がありませんでした。長年の繋がりがあってこそ今の今だなど感じています」

事業を継がれて28年目になる坂井さん。幼い頃から家業を継ぐつもりではいたそうです。

「小さい頃から工場に入ったりはしていません。父も跡取りは私だと思っていたみたいです。高校を卒業して数年は全く別の業種で働いていました。まずは自分で稼ぐことなど社会勉強をしないと、と思っていたので」

建具とは違う業種で働いたことは良い勉強だったとお話された坂井さん。では家業に入るきっかけはなんだったのでしょうか。

「もともと他で数年働いてから家業に入るつもりでいました。ただ以前働いていたところを辞めてすぐに父が亡くなりました。父の体調が思わしくなかったから戻ってきたと思われていますが、個人的な区切りを付けたタイミングと父の急逝がたまたま重なっただけなんです。なので、父と一緒に仕事をしていたの

は四ヶ月くらいでした。外で働いた期間はいい勉強だったことには変わりないですが、見方を変えれば、その期間で父から学べることもあったかもしれないなと思うこともあります。どちらが正解だったのかはわかりませんが、建具以外の世界を知れたというのは良い経験でしたね」

短い期間しか先代から学ぶことが出来なかったとお話された坂井さん。では、これまで続けてこられた技術やノウハウはどうやって学ばれたのでしょうか。

「父が木建会※の立ち上げメンバーだったので、前職を辞めてすぐに木建会に入らせて頂きました。父はすでに卒業していたのでOBでしたが、その頃の会長など上役に就かれていた方は、皆さん父が可愛がっていた人たちでしたので、その流れで私も可愛がってもらいましたね。もちろん技術的な面で祖父に習うこともありました。祖父の時代はほとんどが手作業だったので、機械での製造方法は、木建会の方によく相談して教えてもらいました。祖父も私が20代のうちに亡くなったので、60代70代の職人が顔を連ねる建具組合の中にも若いうちから飛び込んでいきました。そういう経験があったからこ

そ、今の物怖じしない度胸が培われたのかもしれないですね」

様々な困難を乗り越えてきた20代を経て今があるとお話された坂井さん。現在は、顧客ニーズの多様化に対応することが直面している大きな課題とのこと。

「今は家の造りも変わってきていますし、お客様のニーズも変わってきているなと感じています。既製品は大手メーカーが製造しているのですが、なかなか太刀打ちできませんが、特殊な寸法・デザインのものを手掛けていきたいと考えています。そういった特殊な案件が来たときも『出来ません』と言わないようにしていますね。例えうちだけで対応出来なくても、木建会の仲間であつたり、業界の先輩方であつたり、そこそこの得意分野を活かせば作れるものがあるかもしれません。『うちでは出来ません』で断ってしまうとときに、大川全体に仕事が来なくなってしまうのが一番良くないことですから。大川として仕事を受けて、仲間と協力して製品を作り出す。産地・大川として横の繋がりを大切にしなさいといけないうすね。そういう話を仲間同士でもよくしています。競い合うことはもちろん大事ですが、

足引張り合いはしたくないですね」

人との繋がりを大切にしていく坂井さん。では、そんな坂井さんの夢はなんなのでしょうか。

「大川は家具の産地として有名ではありますが、個人的には家具と建具の両輪だと思っています。木工の街だと言われる交流があまりないのも事実です。産地としての強みがたくさんあるのだから、業種の垣根を超えて、風通しの良い繋がりを作っていかれたらと思います。大川ならではの強みを生かして、良いものづくり、良い繋がりができる大川になつてほしいですね」



補助金を利用して導入された機械（ワイドベルトサンダー）

※木建会…大川建具事業協同組合の青年部